

# 勝林寺寺報

## 生命（いのち）とは何か



先日の日本の国会で、臓器移植法が成立し、今度それが施行されることになりました。この法律は、交通事故などで頭を損傷し、脳死になつた人から、心臓や肝臓などの臓器を取り出して、別の人へ移植することができるというものです。脳死とは、まだ呼吸をして心臓が動き、体が温かくても、脳の損傷が激しくて、もう生き返ることが、できないと判断された状態をいうわけで、その人はもう死んだと判定するのです。それは今までの常識からすれば、心臓が動き、呼吸している限り、まだ生きているわけですが、その人の臓器を取り出して利用するために死んだことにします。

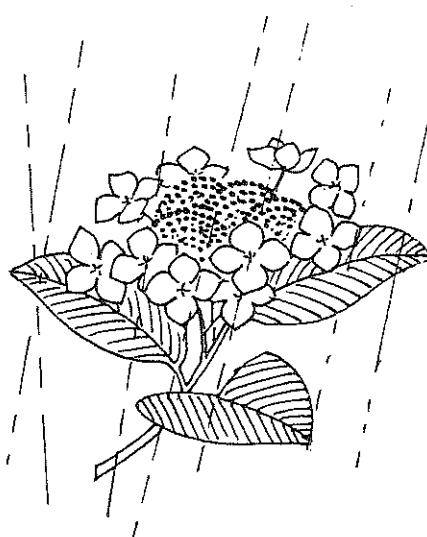
その意味では、これから日本では死の定義が大きく変わってきます。もともと日本語で「死ぬる」とは「息去る」の意味からきたもので、「息が切れる」とをさしましたが、これからは息をしていても死んだといわれるわけです。この法律は、今までの日本人の文化を大きく変えるものです。

このことは、裏返していえば、人間の生命（いのち）とは何かという問題を、新しく投げかけているということでもあります。仏教では、古くから生命（いのち）とは「暖（あたたかさ）とともに存在すると教えてきました。昔から、死ぬることを「冷たくなる」と言ってきた意味がここにあります。しかし、この法律による

まだ体が温かくても脳がダメになつたら、死んだことになるわけです。

今日における医学の進歩は、私たちの命をさまざまに守り、伸ばしてくれましたが、このように死の定義を変え、他人の臓器までも利用して、長生きをはかると発想する医学が、本当に人類の未来を幸福にしてくれるのでしょうか。すでに外国では、この臓器移植をめぐって、人間の臓器が売買されているという事です。最近のニュースでは、中国では囚人の臓器が三百六十万円で売られているそうです。私たち人間の命から、温かさが消え失せないように、心から念ぜずにはおれません。

（信楽峻磨遺稿法語集 1997）



## お知らせ

先月号でもお知らせいたしました「納骨研修旅行」の参加申込期限が近づいております。もう少し（？）席に余裕があります。

ぜひ、ご近所で、ご家族で、ご兄弟姉妹で、お友達で誘い合いいつしょにでかけましょう。申し込みをお待ちしています。

四日（土）仲田たみ子宅一周忌

五日（日）西宗寺前住職三回忌

六日（月）古田広師三回忌

一日（金）中島利一宅三・五〇回忌

二日（土）横山こはる宅一周忌

三日（日）出石組仏婦おみがき奉仕

四日（月）出石組仏婦総会

五日（火）福成寺永代経

六日（水）勝林寺納骨研修旅行

七日（木）西方寺永代経

八日（金）勝林寺納骨研修旅行

九日（土）中嶋正枝宅一七回忌

十日（日）永井誠一宅三三・五〇回忌

十一日（月）みのりを聞く会

（敬称略）

## 行きました

### 六月 勝林寺予定



五月三十・三十一日は、出石組の念佛奉仕団でした。勝林寺からは、住職・坊守を含む十三名が上山して、本山での奉仕作業に汗を流し、ご門主に面会し、お聴聞し、懇親を深めてまいりました。

葬儀  
五月一七日  
豊岡 薩山 久夫様 八十二歳

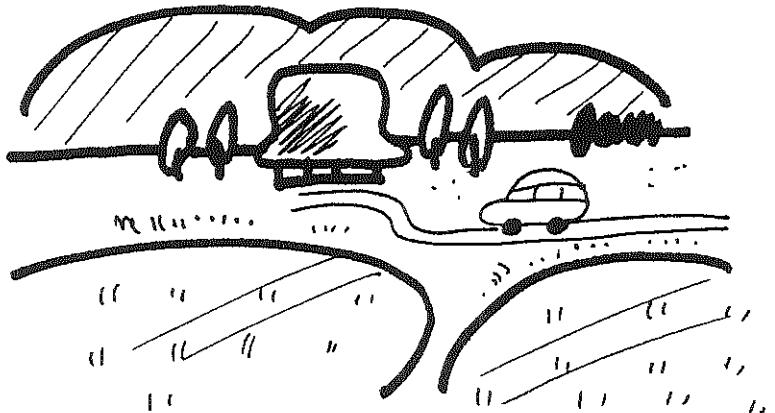
## 何をしたよりに

花の色は 移りにけりな いたづらに  
我が身世にふる ながめせしまに

(百人一首 小野小町)  
(櫻の花の色もあつという間の春だった、ぼん  
やりと長雨の中に眺めていた束の間であつたん  
だ。私の色香も衰えて)

私も九十を超えて、かえりみてみると、まさ  
に一炊の夢であったようと思う。大正ロマンは  
束の間、治安維持法、一二・二十六事件、そして、  
満州事変、日中戦争、大東亜戦争。その間に農  
村大恐慌、米騒動、敗戦。憲法論議と激動波乱  
の百年であつた。

法然さまが出生されたのが、千二百十二年。  
そのころは、藤原貴族や大寺社の所有していた  
荘園のいわば番犬にすぎない武家であつた平家、  
源氏が中央に進出して、天下を争い、歴史を鎌  
倉時代へと移していく。この混沌の中もありな  
がら、父母の戒めに従つて源信も法然も、不变  
の真実（如來招喚の勅命）を聞き続けていく。  
その道しかないと喝破して。



(文責 前住職)

法語カレンダー六月 (HPより一部抜粋)  
**にだよくつねにみ名となえ**  
**ふかきめぐみにこにえかし**

お呼び声。このお呼び声に呼びさまれて、私の往生はある。この真実を比叡や奈良の学者先生に知りたい一法然がこんな願いで  
京都の大原の「勝林院」で開いた集合が「大原問答」であった。そこには、南都北嶺の学僧が集まり、その影響は計り知れないものがあつた。中に、菩提心を拂無するものと念佛往生を批判した明惠上人などは、この後は法然の支持者となつた。一遍などの踊り念佛もここから出発したという。法然の「選択本願念佛集」など鎌倉新仏教興隆の源泉となつた。法然自身は、本志であった市聖（いちひじり）として洛西の光明寺など洛中洛外に庵を建て、都に住む女官、宮廷人、武者、商人など僧俗に授戒、布教した。「勝林院」「勝林寺」と名乗る寺院は今も数少ない。私は、たまたまこの不思議な縁を喜び、奉賛する。

悲惨な沖縄地上戦から七十年余りが経ちました。今、あらためて「兵戈無用」の響きとして、伝わり流れていることは「殺してはならない」「殺されではならない」「戦争はしません」（誓い）と「世の中安穏なれ」（願い）ということ、すなわち「誓願」です。誓願が具体的に私のところにおいてはたらくのは「名号（南無阿弥陀仏）」です。名号は声であり、聞いて欲しいという願いです。「名は声」として聞こえできます。今月の法語にあります「み名となえ」ということにについて親鸞聖人は、名号を称する」と、とこえ、ひとこえ、きくひととおっしゃいます。み名を称えるというと、私が称えているようですが、実は名を「きくひと」と述べられているのです。「聞く」とは、ただ名号を称えるのではなく、その名号をとおして、名号が生まれてくる出處にふれ聞くことです。仏の教えを聞いてきた人たちの上にずっと響いてきた「誓願」の呼び声、その呼び声に耳を澄ましてみれば、時代や社会状況の混乱の中であつても、人間の身を生きて、くださった人の相が見えてきます。仏の願い（悲しみ）は、いつの間にか見失い忘れてしまっていいる「人間に生まれてきた」事実の中で、かけがえのない人として生まれ、生き続けているそのことに応えうる生き方をしていますか、と私の存在自体を深く悲しまれ続けています。その悲しみから聞こえてくる声に私の生きる方向と態度を尋ねていくのです。言葉の本当に意味しているのは響きです。名となつた響きが聞こえていますか。

相馬 豊 (そうま ゆたか)

どすん

五月二十一日は、宗祖親鸞聖人のお誕生日をお祝いする「降誕会（げうたんえ）」でした。私たちが、今こうやってお念佛に出あわせていただき、迷いなくお淨土への

道を歩ませていただけるのは、親鸞聖人のおかげです。そのことに感謝しながらお勤めするものが、降誕会です。亡くなられた命日にお勤めする報恩講に比べると、少し影が薄い気はしますが、本山でも、各末寺でもいろいろな方法でお祝いの行事が持たれます。わが勝林寺では、二十二日に法輪会の皆さんと各教化団体の役員さんの出席のもと、降誕会を勤めさせていただきました。後の懇親祝賀会の中で、役員さんと一緒にお誕生日の方がいらっしゃることがわかり、「わーすごい！」って、何がすごいかわからないけど（笑）ちょっととうれしくて、まるで子供のように盛り上がりました。

少し前「誕生日は、等しくだれにもあり、無条件で「おめでとう」と言つてもらえる唯一の機会」と書かれたコラムを目にしました。そういうえば、「おめでとう」とお祝いの言葉をかけてもらえるときは、ある条件をクリアできたときです。しかも、けつこう困難な条件です。「試験に合格した」「結婚した」「〇〇に選ばれた」などなど…合格しなければ、結婚しなければ、選ばれなければ「おめでとう」は言つてもらえない。「おめでとう」は、条件を満たしたことに対する褒美みたいで、少し色褪せます。その中で、お誕生日の「おめでとう」は、条件などなく、ただただ「産まってきたこと」「あなたが今そこにいること」に対する「おめでとう」です。そして、阿弥陀様のお救い「我に任せよ、必ず救う」もまた、何の条件もなく、わたしがかえります。誠に尊いことあります。（文責坊守）